



学術研究船「白鳳丸」

学術研究船「白鳳丸」は、2004年の海洋研究開発機構の発足にともない、「淡青丸」とともに東京大学海洋研究所（現東京大学大気海洋研究所）から移管された大型研究船です。日本の近海はもちろん、太平洋、インド洋、地中海、極海など世界中の海におもむき、調査研究を行っています。振動をおさえたエンジンや、雑音の少ないスクリューなど、船体のいたるところで高度な海洋観測をおこなうための工夫がなされています。



世界中の海でさまざまな研究を実施

船内にはマルチナロービーム音響測深機、CTD解析処理装置、生物資源音響探査装置、地層探査装置、船上重力計、音響測位システムなど、数多くの高性能研究設備が備えられているほか、6種類の観測ウインチが常設されており、世界中の海でさまざまな分野の海洋調査・研究を実施しています。

世界の海を舞台に研究航海



CTD付採水器による採水作業



IKMTネットによるプランクトンの採取



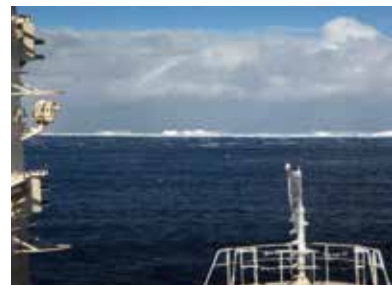
大量採水器による採水作業



湧昇流実験ブイの投入作業



ピストンコアラーによる海底堆積物の採取



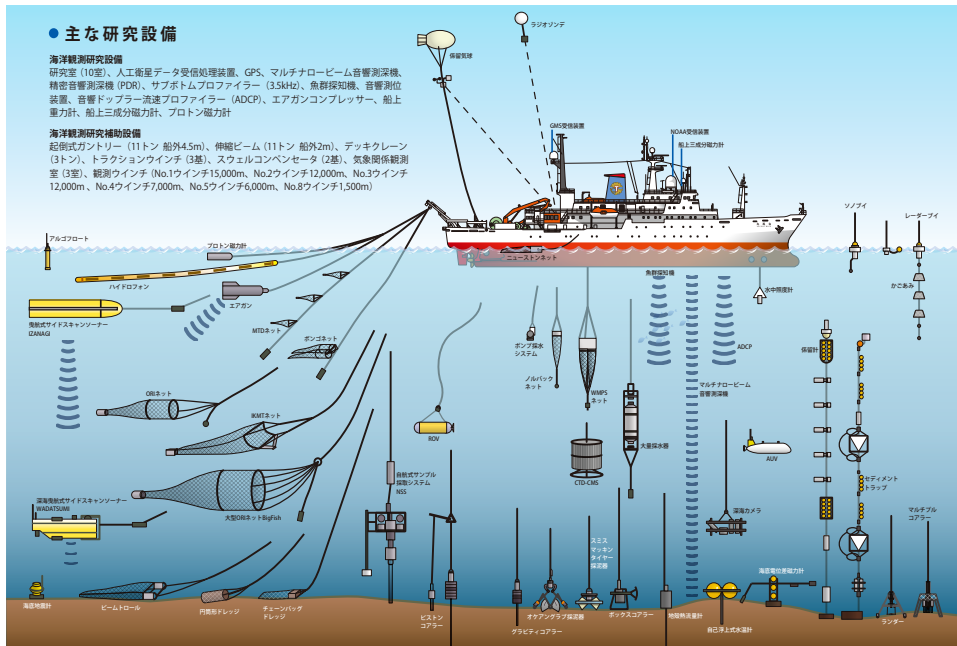
南極海を航行する「白鳳丸」



JAMSTEC 国立研究開発法人
海洋研究開発機構
Japan Agency for Marine-Earth Science and Technology

10室の研究室を使い分け

「白鳳丸」には10室の研究室が備えられており、研究内容によってそれぞれの研究室を使い分けています。たとえば、第7研究室は後部の観測作業甲板に直結したウェット研究室で、採取した海水や海底堆積物コアの処理作業が行えるようにつくられています。また、第6研究室はセミドライ研究室、第5研究室はドライ研究室で、研究内容に応じた様々な実験・分析が行われます。こうした部屋には備え付けの実験装置類はほとんどなく、研究航海ごとに必要な研究機材が運び込まれます。このように、多目的な研究室があるいっぽう、海底地形や気象・海象などの観測作業を行う第1研究室、船上重力計が装備された第9研究室、クリーンルームの第4研究室、低温実験室の第10研究室など、使用目的が限られた専門性の高い研究室も用意されています。



海底地形調査・気象観測を行う第1研究室



CTD解析処理装置、深海用音響測深装置が並ぶ第3研究室



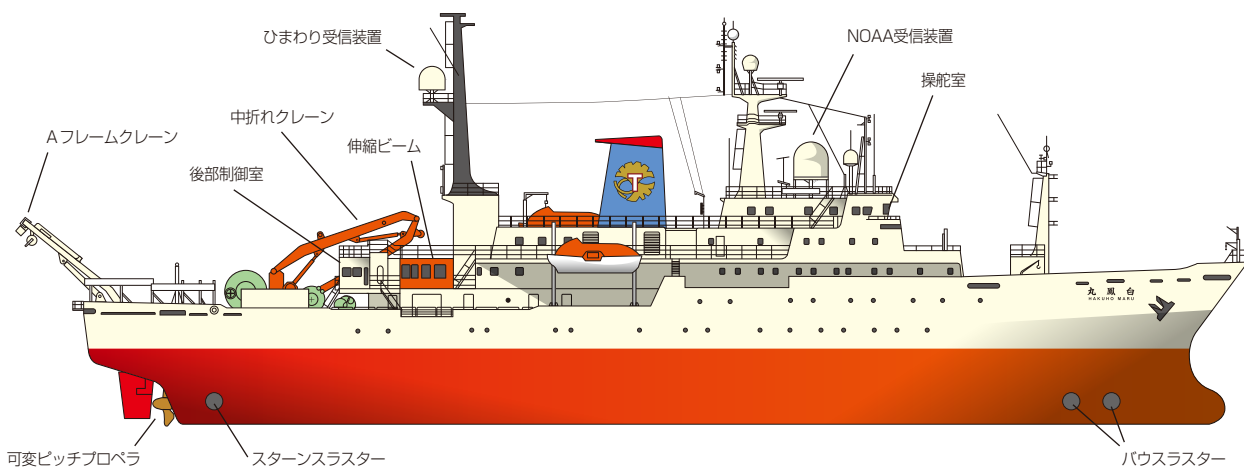
無菌状態での実験を行う第4研究室 (クリーンルーム)



サンプル処理が行われる第7研究室 (ウェットラボ)

白鳳丸の主な経歴

- 1989年 竣工
- 1989年 最初の研究航海実施(伊豆小笠原海域・四国海盆・鹿島沖)
- 1989年 世界一周航海(初の外航)
- 1990年 1990年度より共同利用航海を開始
- 1999年 南海トラフにおいて大規模かつ高密度な深部構造探査を実施
- 2004年 東京大学海洋研究所から独立行政法人海洋研究開発機構へ移管
- 2005年 海上気象通報優良船舶表彰
- 2007年 乗組員が水難救助に協力～東京消防庁臨港消防署から感謝状～
- 2008年 船位通報制度優良通報船舶として表彰
- 2008年 国土交通大臣表彰
- 2014年 海上保安庁長官表彰
- 2017年 気象庁長官表彰(海洋表層水温の観測通報に対する貢献)



主要目	竣工	1989年	喫水	6.3m	定員	89名(乗組員54名/研究者等35名)
	全長	100m	国際総トン数	3,991トン	主推進機関	4サイクルディーゼル機関 1,900ps×4台
	幅	16.2m	航海速力	約16ノット		電気推進モーター 460kw×2台
	深さ	8.9m	航続距離	約12,000マイル	主推進方式	4翼可変ピッチプロペラ(ハイスキュー型×2軸×2舵)

